

日時 平成 30 年 11 月 22 日 (木) 14:00~16:00

会場 神奈川県庁新庁舎 8 階 議会第 4 会議室

○ 青少年課長

皆様、お忙しい中御出席いただきありがとうございます。青少年課長の村岡でございます。開会に先立ち、本日の出欠について御報告いたします。本日は企画調整部会委員 9 名中 5 名、御出席です。笹井委員が、若干遅れるというご連絡をいただいておりますので、6 名出席ということになります。

それでは、藤井部会長、進行をよろしく申し上げます。

○ 藤井部会長

ただ今から、神奈川県青少年問題協議会 第 3 回企画調整部会を開会します。それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

本日は、前回に引き続き、「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」というテーマに沿って、青木委員、坂本委員、田中委員、牧野委員の 4 名に、ご意見を発表していただきたいと思います。

進め方としましては、最初のお二人の意見発表が終わったところで、いったん 10 分ほど質疑応答、意見交換の時間を設けます。次に、あとのお二人から意見発表をいただき、10 分ほど質疑応答、意見交換の時間を設けます。最後に、改めて 25 分ほど、全体を通した意見交換、議論の時間を設けたいと思います。よろしいでしょうか。

それではまず、青木委員から、意見発表をお願いします。

○ 青木委員

こんにちは。青木でございます。今日の発表は私が公民館長になってからのお話ではなく、公民館長は実は今年の 4 月から公民館長になったものですから、それ以前に地域のおじさんとして活動していた内容をまとめたものでございます。その立場で発表しますので、よろしくお願い申し上げます。

ここに書いている、「ともに学び」、「ともに育つ」というのはずっと私が育成活動でいろいろやってきたときのテーマでございます。

厚木は、ご存知のとおりこういう地域でして、私たちの町というのはできてから 34 年目の新しい森の里地区というニュータウンです。もう 34 年経っていますから、ニュータウンでもないですが、そういう町でやっております。人口が 6,200 人強で、世帯数が 2,500 ぐらいの世帯数で、小学校が 1 校と中学校が 1 校、地区公民館が 1 館、それと近隣に厚木西高等学校があり、周りはすべて企業の研究所で囲まれております。もちろん緑の多い町でもございます。

皆さんにちょっと紹介しておきたい団体があります。「学校と地域の融合教育研究会」略して「融合研」と申します。この団体は、確か 2 期か 3 期くらい前に岸 裕司さんが青少年問題協議会の委員にもなっていたので、御存知の方もいらっしゃると思います。私は平成 16 年にこの研究会に出会って、PTA 活動が初めのきっかけだったと思います。この理念が、とても私には気に入って、当時、地域の活動に出たという次第でございます。融合研の理念ですが、当時は「学社連携」と「学社融合」という区分をしておりました。括弧に書いております、支援と連携、それと協働の違いだと僕は見ております。「学社連携」の方は、簡単に言えば Give&Take で足りないものを隣の施設や団体から借りるという考え方です。「学社融合」は、Win&Win の関係に持っていけば当事者意識も強くなって、お互いに継続した活動ができるという考え方です。当時、「融合研」は実はこれは学校と地域の関わり方において、こういう考

え方を立てておりました。

でも、私にとっては、学校と地域というよりも、地域の中でこういうことをやっていかないと継続した活動ができないという考えを持っていました。それを私なりに、森の里に帰ってから、このように考えました。当時はやっぱり森の里地区は、非常に大人の活動が盛んだったのですが、子どもに関わる活動がほとんどなかったです。継続もあまりできなかった。そこで、学校や、公民館、中学校、地域。地域には自治会などいろんな育成活動や育成事業団体いろんなものがありますが、その中にPTAもあり、そういうものとやっぱり連携ではなく、協働しながら、地域活動ができないかと考えていました。もちろんこれは団体同士の協働でなくても、事業と事業の協働でもいいのではないかと考えて、それをずっと続けておりました。そこで生まれた活動が、このような主な活動ですが、いろんな意味で動いて、面白い事業がいっぱい生まれました。「中学生地域ボランティア活動」を平成13年から始めていますが、中学生ももっと有効に活用して、地域で活動して、活躍していく場を作ろうということで、地域の事業の中にどんどん入れてきました。「防災キャンプ」もその一つです。防災訓練が地域で行われていますが、その中に子どもの数がほとんど見えない。子どもの顔がほとんど見えないということで、防災キャンプを前日に行い、翌日の防災訓練に参加しようという活動です。「ふれあい喫茶の授業 in 森小」は、ふれあい喫茶という福祉事業の中に、授業を入れてみたらどうだろうかという、森の里小学校で平成18年から始めております。一番顕著なのは、「森の里夏祭り子ども盆踊りコンテスト」ですが、夏祭りの盆踊りの中に子どもの盆踊りコンテストを入れてみたらどうだろうかと考えてみましたが、見事に当たりまして、元気な活気ある盆踊り大会に変わっております。「森の里通学合宿」などもやりました。それから、「中学生震災復興支援ボランティア事業」も4年続けてやりましたが、中学生がこの地域でボランティアをやっている姿を見て、これが震災活動に絶対に生きていこうということ、中学生に募集をかけて、森の里中学校の生徒たちを東北地方の復興ボランティアに連れて行ったりしました。このように、地域でちょっと考えればいろんな活動ができ、また子どもにとっても、いろんな新たな体験ができると考えております。活動状況の写真でございます。

このような活動を続けていくと、森の里で実施されている事業母体がいろいろできております。1つ目に「地域子ども教室『森っ子ひろば』」が、平成17年度から厚木市の委託事業として始まり、年間18事業で活動を続けています。2つ目に「青健連の育成事業」も内容を変えて、子どもたちがいろんな活動を実地体験できるような活動に変えていこうと、平成20年度からがらりと変えました。今でも年間18~19の事業をやっています。3つ目に、平成26年度から「地域ぐるみ家庭教育支援事業」という、これも厚木市の委託事業で年6事業を抱えております。

今年から「学校運営協議会」、CSですね、コミュニティスクールが始まりましたので、それに伴う地域学校協働本部の事業もスタートしています。1例が、「地域ぐるみ家庭教育支援事業」の概要です。実は、これは今ある地域事業について、ちょっと目線を変えて、親子で参加する事業に変更しようという、ちょっと視点を変えるだけで子ども関係のネットワークができるのではないかとということで、厚木市の社会教育委員会議で発案して厚木市の事業として立ち上げた施策でございます。今はモデル地区として森の里が最初に受けましたが、昨年度から15地区、厚木市の全地区でこの事業がスタートしております。もう一つが、今年から始まりましたCS、コミュニティスクールですけれども、その中で、やはりその片輪の地域が学校協働本部の方を立ち上げないといけないということで、森の里はいち早く「学びネット会議」というものを立ち上げました。これは、今まで地域で活躍している大人で、地域の子どもたちをいろいろ育てている大人たちに呼びかけたら、すぐにこの会議が立ち上がり、いろんな学校に関わる事業や活動に対してコーディネートしながら、次の新しい事業に、学校での活動につなげていこうという組織でございます。

このように、森の里で活動する理念として、共通認識が少しずつ地域で生まれてきました。これは1年、2年で生まれたものではなく、何年もかけて活動していくうちに徐々に生まれてきた理念です。1つ目に、「地域社会が地域の子どもたちを育てよう」という理念です。これは、言葉では言うのは簡単ですが、自分の子以外の地域の子どもたちと接することが多くなるような活動をするわけですから、地域の大人にとっても負担です。徐々に、活動を続けていくうちにそれに賛同する親が増えております。2つ目に「地域ぐるみで、子どもの縁で繋がる人のネットワークづくり」ができあがってきました。これは、地域の活動では自治会やPTA、単独の青健連、育成活動など単独の組織では繋がっていますが、案外それが単独で事業を行って、何も子どもたちの育成活動に繋がらないということが多少ありました。それをずっと融合しましょう。一緒にやりましょう。と呼びかけていくうちに、本当に子どもの縁で繋がる人のネットワークづくりができるようになりました。それも、地域ぐるみでということ、これは大きな利点になりました。3つ目は、子どものためだけではなく、実際に子どものために活動をしていると自分のためにもなっている。大人のためにもなっているということで、「ともに学び、ともに育つ、成長するということが自覚できるようになってきました。これは、大きなまちづくりに繋がることではないかと思っております。このような理念のもとで、子どもたちの実体験の場の創出や、きっかけづくりをどんどんしていております。多様な人との出会いから生まれるコミュニケーション。また、子ども同士の仲間づくり、大人同士の仲間づくり、人の繋がりということが、生まれていったのだと思います。私は地域ができることを考えるうちに、やはり専門的な活動は、専門的な知識とスキルが必要で、それに手を出すと事故を起こすのはもう目に見えております。でも、地域の社会の中でできることは、いっぱいあるのではないかと、それが社会教育の中でできることも共通するのではないかと僕は思っております。前回の部会でも言いましたが、予防型が地域にできる本当のことではないかと、育成に必要なことではないかと思っております。問題が起こる前のことを、たくさんやることが地域ではいっぱいあるのではないかと。そのための地域、地域社会が地域の子どもを育てるとか、地域ぐるみでとか、ともに学んでともに育つという理念が生きてくるのではないかと考えております。

実は、この繋がり絵は、私が考えたのではなく、ある委員会でみんなで実行委員会を作り、うちの森の里はどういう関係だろうと絵にしてみたらどうなるだろうということで作ったのがこういう絵です。真ん中に地域の子どもがいて、周りにいろんな団体が支えている。もう自治会なんか古いよとか、PTAは古いよとか、人が集まらないよと言っていますが、子どもの関係で、それが繋がっていくのを目に見えて、森の里ではこういう体系ができていて、我々はこれを緩やかな繋がりと言っています。普段は単独で、それぞれが事業をやっていますが、子どものため、地域の大人のためにやっています。それが、協働事業をやろうと言ったときに、お互いにゆるやかに繋がり、できる時にできることをやる。組織になっていくと考えて、14年間何となくこんな繋がりですべての子どもたちを支えているということをやっております。

子どもが育つ環境づくりは、やはり家庭だけではできないし、学校だけでもできないし、やっぱり地域社会だけでもできない。やっぱり、地域総ぐるみで、みんなが認識し合い、共通認識を持って環境づくりをしないといけないと思っております。私は、いつも言っていますが、青少年の育成は、イコールまちづくりそのものではないかと、それを自分たちの手で作っていく。それにちょっと行政が支えてあげると、成功するのではないかといつも思っております。育成だけを考えると、いろんな単品になりますが、そういう環境、子どもが育つ環境を作るのは、まさにまちづくりそのものであると考えて、普段から地域の大人たちが、子どもを見守るということをやっていくことを、心につけていかなければいけないだろうと思っております。それが、青少年が育つ大きな環境づくりではないかと思っております。

今日は、ちょっといいものを見つけたものですから持ってきました。森の里小学校だよりの今月号に校長先生が書いた文章をちょっと読ませていただきます。「10月14日と15日に、

森の里地区青少年育成会主催の行事「森の里通学合宿」が公民館で開催されました。14日の夕食の時間にお邪魔すると、子どもたちはグループで楽しそうに夕食を食べていました。その傍らで地域の方々とともに、中高生、大学生が子どもたちの活動を支え、手際よく働いていました。その姿は、とても頼もしい一言です。ある大学生が、「森の里の人づくりの理念が素晴らしく、私だけではなくここで育った皆が森の里を誇りに思っています。ですから、私は大学生になって恩返しをしたいのです。」と話してくれました。校長先生が、これを聞いてもうびっくりしたそうです。もう一つ、こんなことも書いています。「子どもたちにとって、思い出になり、誇りと思えるまちづくりをしていくという森の里のまちづくりの精神は、そこから子どもや、大人も子どもも、ともに学び、ともに育つ活動が創造され、繋がりが生まれ、活動に生かされているのではないのでしょうか。その先駆けとなった方々の先を見通したビジョンとミッションの高さには尊敬の念を禁じ得ません。」いいことを書いてくれたなと思って、私たちの理念をそのまま理解していただいたのかなと思って、公民館だよりは今月号でしたが、それを見ながら、改めて、自分たちのまちづくりは間違っていなかったのかなと思います。

私たちの後継者が育っているかという、またそれもまた面白いお話で、今年からCS、コミュニティスクールが始まりました。その中に地域協働本部をどうしてもつくらないといけないうことで、いろんな人にお話をし、「やってみない」と言ってお声をかけたら、あるお母さんがこう言いました。「青木さんたちのグループが、私の子どもを育ててくれた。もう私の子どもは大学生になった。でも、これからは自分たちの子どもを育ててくれたんだから、私が地域の子どもたちを育てるんだ。ぜひ参加したい。」ということをお願いいただきました。私はそういう大人が1人でも増えることが、育成環境を変える大きなきっかけになるのではないかと考えております。こういう環境にこそ、子どもが生きて、生きいきと活動し、友達同士で話したり、周りの大人と色々な方々とお話したり、コミュニケーションをとることの環境こそが、育成活動の一番大きなねらいではないかと考えております。ちょっと時間をオーバーしましたが、以上でございます。ありがとうございました。

○ 藤井部会長

ありがとうございました。それでは、続いて坂本委員から意見発表をお願いします。

○ 坂本委員

私は大学生の目線から、様々なSNSやアプリがある中で、どのように利用されているのかということを探りました。特別、専門という訳ではないので、個人的なアプリに関する意見となります。

先行研究ですが、以前に参照されていた土井隆義さんの「キャラ化する／される子どもたち―排他社会における新たな人間像」です。コミュニティについて、SNSに限らず言えることだと思うのですが、多様な価値観が称賛されていく中で、生きていくための共通の指針がない。その指針でも、何かしらないといけない。それが、他者から承認を得ることで自己の評価が決まると言っています。これは、就活になると突然これまで一緒に授業を受けてきたのに、自己アピールやグループディスカッションをやらされることも、生きづらさというか、その一つとして、ひきこもりの問題にも繋がっていくことがあるのかなと思いました。

他者との承認を得るときに、どのように得るかという、それはコミュニケーション能力によって決まるそうです。コミュニケーション能力が基準になるので、どうしても自己肯定感を得やすい同質なグループで固まりがちになります。コミュニケーション能力が評価の基準になると、学校の中でもスクールカーストというものが、高校生まで意識していませんでしたが、大学でこういう言葉を知ると、スクールカーストもあったなと思います。自分の学校でも、正直に言って、あまり頭が良くなくても、声が大きくて、その場をうるさく賑やかにできる人の

方がいい人みたいに見える。LINE のグループも男女一緒の部活といっても、同じ学年の女子だけの LINE グループがある。同質なグループで固まりがちだなとすることがあります。

もう一つの先行研究は、LINE について調べた研究ですが、「既存の関係の中でのエピソード」というもので、「既読無視」や「気づかなきゃいけない」というのはすごく共感できるなと思いました。既読というシステムがあるからこそ、読んだのに返してくれないとイライラしてしまう。返事をできないときには、メッセージがきているのは知っているけれども読まない。いい面としては、スムーズなやりとりや、ローコストや、スクロールですぐに記録を遡ることができるということが挙げられています。これは、後で御説明しますが、私が照会したアンケートの中にもいい面としてたくさん挙げられています。反対に、通知のわずらわしさや、今は送信取り消しの機能がありますが、それができる前は1回送って、それが間違っていると誤解をうんでしまうといったことがありました。

LINE の魅力や私たちがどう使っているかということについてです。あまりに、あたり前に使っており、楽しいとか、なぜ使うのかということとはこれまで考えたことはありませんでした。ただ、メールのように、題名などがいらないので会話のような手軽さがあります。メールですと、パソコンを開くことも面倒ですし、若者になるほど、年齢が若くなるほど、パソコンよりもスマホを使うことが何かの調査でも多くなっています。Twitter や Facebook よりも閉じた空間の中でコミュニケーションができる。あまりにも Twitter や Facebook はオープンだということは、一応意識しています。LINE だと基本的に電話帳の中での知り合いなので、カジュアルなコミュニケーションが1対1でできることも、特徴だと思います。プッシュ通知と既読マークがつくのでリアルタイムのやりとりができて、それがつい見えてしまう原因にもなります。私たちは、授業で模擬授業や基礎ゼミなどで、グループ発表をするとなったらまず初めに、テーマを何にするかというよりも、まず先に LINE グループをつくる。それで情報などは、授業外でやっています。授業内のちょっとした調べものも、先生がこの時間スマホを使っていいからちょっと調べてみてとやります。ほとんどの人がスマホを持っているとはいえ、持っていない子もいるのにどうするのだろうと思うときもあります。実際に、私は、高校のときにスマホを持っていませんでした。それで、調べていいよと言われても調べられない。ちょっとみじめな思いをしたことがありました。

ここからは、私がアンケートをとったものについてのデータです。このアンケートは、最初のページに書いてありますが、私がグーグルフォームで作成し、サークルのメーリングリストや、Twitter、LINE グループに流して協力してもらいました。現在使用している SNS アプリは予想通り LINE が一番で、そのあと Twitter、Instagram、Facebook の順になっています。LINE について書かれた文献が LINE と mixi を比較しているものが多かったですが、私は mixi を見たことはないし、ほとんど使っている人はいないという感じです。選択肢は、ネット人気検索アプリランキングや、他の文献を調べて、選択肢を設定しました。

スマートフォンを持ち始めた学年については、高校生以上の若者を対象にしたアンケートを取りましたが、やはり高校生、今は年齢が若くなるほどスマートフォンを持つのが早いです。持ち始めるのは、高校生になるときに、高1になった時に買い換える。携帯を初めて持つという人がすごく多いです。半分以上の人が、高1のときにスマートフォンを持ち始めたといっています。

LINE を使い始めた学年は、ほぼスマホを持ち始めた時期と重なります。高校生の方が、小学校や中学校のときにシステムが人気になってきたこともあり、使い始めが早いです。また、高校生で使い始める人が一番多いですが、パソコンや携帯でも LINE を使えるので、スマホを持つ以前から始めたという人もいます。

次に、学校の LINE グループについてです。学校の LINE グループについて調べた理由は、中学校の先生に、中学生のスマホ利用について伺うと、半分以上の人が持っているし、半分以上

の人は多分クラス LINE に入っていると思うけど、という回答でした。学校も、スマホを持っているか、LINE をやっているかということも聞いても、個人的なトークや、クラスにグループ LINE があるかどうかまでは、なかなか聞けない。結構、グレーゾーンな感じがすると思いました。今の中学生のおそらく3分の2位はスマホを持っており、そのうち半分以上がクラス LINE に入っているとの回答でした。左側のオレンジの部分、「LINE グループはあったが、入っていなかった」というのが中学生だと多い。高校生になるとぐっと「LINE グループがあり、自分も参加していた」というのが多くなります。中学校や高校のクラス LINE の使用内容は、大抵は時間割の共有や、文化祭の準備などですが、先生がいない、先生が見えないところでいじめに発展することもあるのではないかなと思いました。

また、「LINE グループがあったのに、参加していなかった」の理由については、中学生は、「参加したかったけれど、LINE ができる端末を持っていなかった」という回答が多くなっています。高校生になるとそれはすごく減り、「人間関係が面倒くさいから入らない」という自分の意思で入らないとなっています。中学生ですと、そういう訳にはいかないようです。「参加したかったが、LINE をできる端末を持ってない」ということについて、みんなに悪気がないことをわかっているけど、LINE だけで情報が共有され、結末だけを聞かされるとか、そもそも結末すら話が伝わってこないとか、SNSのクラス LINE の中で話題になっていることを現実のクラスで話したときに、話題についていけないので、リアルの関係でも疎外感を味わってしまうという話を聞きました。

LINE を利用して良かったと思う点、便利だと思う点について聞いてみました。上位の三つは、先ほどの先行研究の方でも挙げられていますが、「無料で利用できる」、「写真や動画をすぐ送れる」、「テンポが速く、スムーズにできる」という結果でした。ほかに、「同じグループ LINE に入っている人とさらに個人トークもできる」という選択肢をつくりました。同じグループに入っている友達を承認して、アカウントを送ってもらうと友達の友達とも友達になれば、連絡がとりあえるようになります。また、「既読マークがつくので、相手を読んだか確認できる」というところも LINE の良い点として挙げられていました。具体的には、待ち合わせの時に、相手にリアルタイムの居場所を伝えられ、テンポが早いことがメリットといった使い方がされているのかなと思います。ただ、テンポが速く、リアルタイムで今どこ、今到着したよと、駅のどこで会うかというのは、その場で決める感じなので、待ち合わせについて、緩くしか決めなくなるので、何というか、能力が衰えている感じがするなと思いました。具体例の「部活の会議や大勢への連絡をするときにグループは便利」については、すごく共感できます。サークルにメーリングリストはありますが、みんなメールを見ないし、ゼミでも教授も一緒に入った LINE グループがあり、基本的に連絡はそちらです。LINE の方がよく使っています。書類の情報交換もできるので、今スマホだったら LINE に送ってもワードやパワーポイント、PDFの資料を見られるので便利です。

反対に「LINE を利用していて、嫌だ、困ったと思う点」についてです。1番は「一度送ったトークが消せない」ということでした。ただ、これは送信取り消しの機能がついたので、少し解消されているのではないかと思います。その他に「通知が煩わしい」、「即レスしなければならない雰囲気嫌だ」というのがありました。これは、既読がつくというシステムに起因にしているのではないかと思います。また、「個人情報の流出」については出会い系サイトや広告が勝手に送られてくるのが嫌だなと思います。嫌な点の具体的な内容に、「グループ LINE が活発に動いて通知がたくさん来る」についてですが、自分に関係ない話題や、スタンプ1個でも、大事な相談でも同じ通知一つなので、やっぱり来たら気になる。煩わしいと思うときがあります。また、「あまり仲良くない人からラインが来た時」、「たわいもない話を続けるのが面倒くさい」、「送ったコメントにすぐ既読がついた時」についてです。LINE は、Twitter、Facebook と違い、一対一のコミュニケーションなので、メッセージがきたら会話を

始めなきゃいけないというようになってしまいます。それが、とりあえず送って後で返事もらえばいいなと思ったのに、何か要件を相手に送って、すぐ既読がついてしまうとその場でこっちも何か対応しなくてはならないとなるので、ちょっと困ってしまうという気持ちも良くわかります。また、「送ったコメントにすぐ既読がつく」や、「既読をつけたが、返信が遅くなり、相手から返信の催促がきた時」、LINE の良い面でも「既読」は挙げられており、悪い面、嫌な点でも「既読」が挙げられているのが、興味深いと思いました。LINE は、普通日本語として使っているのですが、読むとか、メッセージを開くではなく、「既読」というマークをつけるか、つけないという話になっていることが面白いなと思いました。

最後に、LINE 以外の上位の人気だった、よく皆が使っている SNS についてです。私の主観です。まず、Facebook は基本的に実名です。皆さんの中でも使っている方はいらっしゃると思いますが、「共通の友人」というものが出てきて、友達の友達が友達になるという交流の幅が広がります。例えば、音楽大学に行っていた友達が、プロの演奏者に直接、友達のリクエストをかけ、今度レッスンしていただけますかとリクエストできるので、人脈が広がると言っていました。ただ基本的に実名なので、「炎上」が起こりづらい分、あたりさわりのない報告というイメージが強いです。中高生、大学生よりも大人が自己発信の場として、使うイメージかなと思います。実際にアンケートでも、高校生より大学生の利用率が高く、私も実際に大学2年生の時に初めて使ったので、年齢がちょっと高めになってきたのかなと思います。

次に Twitter についてです。Twitter は匿名でも可能です。1人でいくつもアカウントを持つことができます。パスワードやアカウントを変えれば、そこでフォロー、フォロワーの関係も変わってくるので、ある意味コミュニティが変わってくるということになると思います。1人で、高校時代の友達と繋がる高校アカウントや、大学で繋がった友達と使う大学アカウント、あとは嵐が好きで嵐のオタクと繋がる趣味アカ、サークルの公式アカウントをサークルの皆でフォローしていて、共有して宣伝を流すというふうに、幾つもアカウントを持つことができます。「リツイート」と「いいね」で簡単に情報を拡散できます。同意や拡散、さらしなど色々な意味があるらしいです。何気なくやっているのは、みんな結構 Twitter や Instagram、Facebook も発信はほとんどしないと言います。でも、Twitter や「誰々がリツイートしました」とか、「誰々がいいねしました」ということがランダムに通知として送られてきます。それは、結局自分の考えとして発信しているのと同じなのです。ただ、そのことを忘れてしまっている人が多いのではないかと思います。

最後に Instagram についてです。Instagram は圧倒的に女子の利用率が高いです。アンケートでも女子が6~7割で、男子が3割で、4割いかないという結果でした。かわいいや、きれいな、楽しいが感情の基本なので、ディズニーに行ったとか、誰かと遊んだとか、かわいいケーキを食べたといった自慢。正直いって、自慢とか承認してもらいたいただけなのかなというふうに見えます。文字より写真と動画なので、文字は写真の中にちまちま入れて、涙ぐましい努力をして、皆がやっているのを脇から見て、私はやっていないので思っています。Instagram の中では、「ストーリー」という24時間で消えるものが人気です。これは、いくらでもタップすると、動画が出てきます。それをついつい、ずっと見てしまい、データや時間を浪費することになります。でも、皆は Instagram をすごく気にするわりに、インスタ映えのために躍起になっていると、ちょっとひかれます。あまりいい感じはしない。Twitter も、Instagram もどちらも発信する場ではありますが、私の言葉ではないのですが、テレビや Twitter で「Instagram は選別されたごみ」、「Twitter はただのごみ」。「Instagram は目の保養」、「Twitter は修羅の国」といったことをいっています。Instagram は、基本的にキラキラのことしか載せないですが、Twitter だと「進捗 bot」のように、徹夜しないとならない時に、ここまで終わった、ここまで終わったと、誰かに報告したいわけではなく、ただ、眠くなってしまうからやる。遅刻したとか、今日頭が痛いということを書いて、本当に独り言として載せて

いる人も多いです。世界に拡散されている自覚があるのかなという感じがします。Instagramだと、写真や名前も出るし、顔写真もすごく多いので、プライバシーとか、ちゃんと気にしているのかな、危ないなと思います。

アンケートでスマホや携帯を持っていることで、勉強に集中できない。頻繁にあるといったことを聞きました。どちらかという、集中できないと思ったことがあるという人が80%以上でした。また、スマホがないと一日不安になる人もすごく多いです。スマホで音楽を聴くこともあるので、必ずしもずっと画面を見ている人ばかりではないですが、スマホをいじる時間は長くなっているし、スマホやSNSへの依存度は高くなっていると思います。あまり問題提起ではないですが、以上で私の発表を終わります。

○ 藤井部会長

ありがとうございました。それではただいまの2人のご意見をもとに質疑応答、意見交換を行いたいと思います。どなたかご意見、またご質問はございますか。

○ 牧野委員

ありがとうございました。私の報告とも関わってくるのですが、最初に青木委員に伺いたいのですが、とても活発に地域で動かれているのですね。実は、私たちも同じようなことをやっていて、気になることが幾つかあります。例えば、子どもが育つという時の「育つ」というイメージというか感覚ですが、「育成する」ということが、どのように捉えられているのかということが気になっています。例えば、私達が子どもの頃に言われていたような、「子どもが成長する」または「育っていく」という感じと、今の若者で「子どもたちが育つ」という感じは、同じものなのか、違うものとして捉えられているのか。同じ言葉を使っていますが、同じなのか、違うのかということが気になります。

それから、坂本委員のご報告とも関わりますが、例えば、承認されると評価に繋がるというか、若い人たちが「承認」とは一体何だと受け止めているのか、「評価」とは一体何だと受け止めているのかということも気になっています。そのあたり、何かイメージですとか、感じでも結構ですので、ちょっと教えていただきたいなと思いました。いかがでしょうか。

○ 青木委員

私からよろしいですか。そこまで深く考えたことは実はない。ないのが現状ですが、我々、十何年間も、地域で子どもの係わりの活動をしていますと、やはり小さな一年生や幼稚園の子どもが、大人になってある日突然我々の活動を手伝いにきて、こんなに成長したのかとびっくりしました。この喜び以外は、私にはないのです。やはり、それぞれ人には個性があり、いろいろな育ち方があると思うのですが、人にご迷惑かけないような大人に成長していただけるのが一番、私達にとっては成果かなと思っていますし、加害者にならないということです。それが、私達にとっても一つの願いだろうし、また、その大人たちが自分たちの地域に戻ってきてくれて、またその小さな子どもたちと一緒に活動してくれれば、それはまたありがたいかなと思っています。それこそが、まちづくりではないかなと、僕は認識しております。複雑なことはちょっと考えておりません。

○ 坂本委員

私が思う「評価」ですが、一番わかりやすいのは「いいね」とか「リツイート」の数だと思います。あとは、何となく感じますが表現できません。

○ **牧野委員**

例えば、リツイートが多いと、なぜ評価が高いと自分は思うのですか。

○ **坂本委員**

皆も同じ考えというか、同意というか。例えば、体験。どこかに旅行にいつてきたことを載せて、いいねや、リツイートされたら、そこに行ってみたいと思ってくれているかなと、そういう感じです。

○ **牧野委員**

それは、承認されていることになるのですか。「いいね」とぼちっと押されると「承認してもらえた」と思うのですか。

○ **坂本委員**

嬉しいとは思いません。

○ **牧野委員**

それは、承認なのですか、評価されたと思っているわけですか。それは、何を評価されたと思うのですか。「私が評価された」のか、「私が投稿したものが評価された」のか。私が評価されていると思ってしまう。

○ **坂本委員**

私は、載せるものは色々ですが、体験や考えを載せて、いいねとかリツイートされるのだったら、私自身が評価されていることになるのかなと思います。体験ですと、体験かもしれませんが、よくわかりません。

○ **牧野委員**

わかりました。もう一ついいですか。先ほど「LINE で既読になると嫌だ」ということがありました。私は面倒なので LINE をしていません。学生にメールを送っても、1人も返事が絶対に返ってこないです。これは、既読にならないからですか。既読マークがでないから返さない。既読マークがでるようだったら、返しますか。

○ **坂本委員**

多分、返信が返ってくる割合は高くなると思います。LINE の方がラフに、はじめの挨拶がなく送ることができるから、そもそもメールを開かないという人が多いです。

○ **牧野委員**

ゼミで、メールを使うということは確認してあり、いわゆる同報メールで全員に送ります。絶対に、1人も返ってこない。1人、1人名前をあてて送って、返信くれないとどうなるよと書くと、返ってくる。ですから、見ているのです、絶対。だけど、絶対返ってこないですよ。それは、どうなっているのですか。

○ **坂本委員**

それは、お知らせをもらったということで、それだけで終わります。

○ **牧野委員**

調査に行くので、返信されないと困ると書いて送っています。けれども、絶対に1人も返ってこないです。

○ **坂本委員**

返信して欲しいって書いてあるメールですか。

○ **牧野委員**

面倒くさいのでしょうか。

○ **坂本委員**

既読がつくと困ると思います。同じ面倒くささの中でも。

○ **牧野委員**

その時に、返信来ないと承認しないよと書いたら返ってきますか。君のことは、もう認めないからというように。

○ **坂本委員**

ゼミの先生から認められなくなったら、大学を卒業できなくなってしまうので。

○ **牧野委員**

このへんが全然わからないのです。どういう人間関係になっているのか。だから、我々は尊重されていないということですね。学生から承認されていない。評価されていない。

○ **坂本委員**

ちょっと、外の人という感じがあります。やっぱり。学生だけという中では、やっぱり先生は、気を遣わないとならない相手となりますよね。

○ **青木委員**

気を遣うようでしたら、人間ができていますよね。人間形成ができていますよね。

○ **牧野委員**

じゃあ、まだ成長していないということですね。すみません。ありがとうございました。

○ **藤井部会長**

ほかによろしいでしょうか。それでは次に、田中委員から意見発表をお願いしたいと思います。

○ **田中委員**

よろしく申し上げます。前回、欠席してしまいまして、すみません。もしかしたら前回の議論の文脈を抑えられていない発表になってしまっているかもしれませんが、ご容赦ください。

初めに、私たちの自己紹介をさせていただきたいと思います。私はエティックというNPOに所属しております。エティック自体は25年前ぐらいから活動をし始め、渋谷を拠点に活動している団体です。起業家精神を持った若い人たちを社会に増やそうというミッションをもって活動している団体です。私自身は2009年に前職からエティック横浜ランチというのを立

ち上げるタイミングで転職して、横浜で今まで9年目に入りますが、横浜ランチとして活動してきています。

横浜での活動を簡単にご紹介させていただきます。1つ目は、「長期実践型インターンシップのコーディネート」ということで、大学生を主に対象にして、横浜市内の中小ベンチャー企業さんに対して半年間、インターンシップに行くところのコーディネートをしています。毎年、大体学生50人、60人ぐらいと個別にキャリア面談をして、その中で、大学の授業との両立や、条件などインターンシップにコミットできるという学生を中心に15人程度、集中支援と書いてありますが、個別にインターンシップ先に行ってから、面談をしながらその学生のキャリアビジョンを聞いたり、モチベーションが下がっている時に励ましたりというような形で大学生と個別に関わっています。2つ目は、「起業を考える学生のキャリア相談」ということで、神奈川県産業振興課の事業の一環でやっております。起業したいとか、ビジネスプランがあるといた学生たちと一緒に、年間これも50人ぐらい面談をして、そのビジネスプランを聞いたり、人生の相談を受けるようなことをやっています。後程ご紹介したいのですが、皆様のお手元に配らせていただいた、マイプロというものと、神奈川学生ビジネスプランコンテストというのが、県の事業とご一緒にやっている事業で、こういったことの事務局運営をしています。その他、横浜でいろいろ社会企業家の方の支援に携わったりとか、横浜市教育委員会さんと一緒に公立小中学校の子どもたちと社会をつなげていくようなキャリア教育の文脈でお伝えしたりという形で活動しています。私からの話は、現場からの話になるかと思いますが、主に大学生を中心に関わってきていることについて今日はお話させていただければと思います。

最初に、これは借り物というか、巷でよく言われている話になるかと思いますが。

VUCA (Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)の頭文字を並べたもの。)の時代などと言われますが、すごく不確実性、複雑性が高い時代で、正解はないとか、前例や経験が通じにくいとか、働き方も多様化しており、女性もどんどん働くようになってきている。また、外国に繋がる人達が働くといったことも含めて、社会やビジネス環境がすごく複雑になってきています。子ども、若者が成長した先に社会があるので、社会に接続していくという意味で言うと、やっぱり子どもたち、青少年が社会に出る準備がすごく難しくなっているのではないかと私は捉えています。昔のように、大学に入学したら上がりのように、昔もそうではなかったと思うのですが、何となくこの大学に入ったら先が見えるような感じとか、この会社に内定したら先が見えるようになるということは、ちょっと前から全然そんなことはないですし、私の同期も含めて3年以内に離職をするということも含めて、育つのに時間がかかる時代、育つのにというか、まだ私自身もこの社会で一人前になれるのかということも、葛藤もありますし、若い世代はなおさらそうなのだろうと捉えています。

ミレニアルズ世代が今回、青少年というところで、ターゲットになっているということで、辛うじて私も入っております、このミレニアルズに含まれております。この世代の特徴を調べてみたのですが、やっぱり育ってきた環境として、ある程度豊かな、いろいろ格差は広がっているとは言われていても、サービスは存在しており、体罰がなくなり、厳しい指導や強制などは中々されなくなっている。それから、個性や、「らしさ」みたいなことを伸ばしましょうという教育を受けてきており、失敗する前に親がサポートするといいますが、少子化もありますので、大人たちが沢山子どもたちを守るとか、怪我しないようにというように、先にリスクを取ってあげて、育つということなのだろうと思います。ゲームの遊び方といったことも、これまでの青少年問題協議会でも議論されてきたと思いますが、自由に空き地を走りまわることから、どんどん、どんどん遊ぶ範囲が部屋の中で、この画面とともにみたいな遊び方に変ってきているということがあろうかと考えています。私たちも、大学生と接していて、非常に感じるのは、個性を尊重してくれる大人の言うことは聞くという感じがすごくあ

ります。そこが否定されそうとか、脅かされそうというのを感じ取ると彼らは、すごく殻を閉じる。もしくは、別の振る舞いを選択するということをしごく感じています。ですから、信頼関係を築くことも、結構、対等感が大事で、上からこられているなどと思うと、すごく閉じるという感じがあります。同じ目線で、あなたの「らしさ」、個性を尊重しているよというスタンスをとっていないと、コミュニケーションが取り繕われたものになり、本音が聞こえなくなってくるということをしごく感じています。また、根性論や、我慢、強制とか、一生懸命やった先にいい結果があるということが通じにくいとか、そういう話をして「本当？それ」という感じにいるなということが、私が普段、学生と接しているところなんです。

ここからは、SNSの話がテーマだと思うので、私の実践も少しご紹介しながら、SNSというのは、もう存在しており、良い部分も含めて、私も含めてサービスを楽しんでいるのでそれを所与のものとしながら、どんなことが起きているのかということ、現場の例ということでご紹介していけたらと思っています。その前提として、今日は「マイプロ for Kanagawa」という取り組みを事例にお話できればと思っています。この「マイプロ for Kanagawa」という取り組みは、自分のマイプロジェクトを立ち上げ、3ヶ月間、一生懸命それをまわしてみましょ。いろんな専門家に話を聞きにいったり、情報を集めたりしながらプロジェクトを立ち上げて、一つ結果を出していきましょうというものです。起業支援という文脈なので、どうしても起業を目指す学生たちに向けて、プロジェクトを実践する。PDCAサイクルをまわしてみましょという取り組みとしてやっています。実は、こちらのチラシの裏側を見ていただくと、今年度、私たちが接点を持っている大学生たちの個人情報が出ていますが、プロジェクトの名前が出てきます。フードロスをやりたいとか、マイノリティーを叫ぶライブプロジェクトとか、電車で快眠できる枕を開発しちゃったという理科大学の学生など、いろんな子たちが、いろんなプロジェクトを構想して、それを3ヶ月間の中で何らかの形にしていくということをやっているのがマイプロです。その中で、私たちは週報というのをやっていて、ウィークリーレポートですが、それをFacebook上で運用しています。毎週、こんなことをやったよとか、来週はこんなことをやろうと思うというのを、メンバー同士でお互いに報告しあって、リズムを作っていきますよということ、そういう意図でやっているものです。その辺の話はこの後、どんなやりとりがされているのかということをお話したいと思います。もう一つ、ちょっと話が前後しますが、このマイプロ生たちと私が接している、すごく思うのは、デジタルネイティブと言われますが、彼らはすごく使い方が上手で、いろんな道具の使い方が上手だなと思っています。自分でこういうプロジェクトを構想して、やろうと思ったら、本当にそこが内発的な動機と紐づいていると、例えば、クラウドファンディングサイトを立ち上げてお金を集めるみたいなことや、「クッキングパーティ横浜」というプロジェクトは、フードロスのチームがやっていますが、自分のバイト先で出た食品廃棄のものを集めてきて、まだ食べられるじゃないかということをしてもらうためにパーティを開くといったことを、SNSやクラウドファンディングサイト、ブログなどあらゆるものを使って人を集めていって、自分の思ったようなことを形にすることがすごい。すごい一方で、そういう道具が使える人たちが若い世代に多いなと思って。そこの可能性も一方でありながら、いろいろ指摘されている問題というもの、裏表であるのだろうなと感じています。先ほど、マイプロのFacebookでの自己開示の話ですが、例えばということで一つ、本人に許可をもらって来ました。ウィークリーレポートみたいなやりとりと、リアルで対面でもその子たちと会って、やりとりをしています。喧嘩別れしたお母さんに4年ぶりに会ってきたという話で、この子は、居場所を作りたい。大学生のための居場所づくりというようなプロジェクトを構想しています。では、なぜそのプロジェクトを構想したのかといえば、自分と親との関係性に原因があったということ、SNS上で自己開示しているという場面です。こんなふうに、壁を作っていたのは自分の方だったとか、こういうダサい部分は、中々SNSでも開示できなくてということ、クローズドの関係

性の中で、対面でも会っている関係性の中で自己開示し、そこに対してコメントが入り、言ってくれてよかったとか、話を聞くよというやりとりがなされているという一つの例です。リアルでの信頼関係ができていて、SNS 上で自己開示するようなどころもあるのだなと思いました。結構、ポロっと実は自分はアル中の母親がいてみたいなことが、マイプロの子たちが Facebook 上で、びっくりするような自己開示をする場面を何度か私も目の当たりにしています。私の感覚からは、あまり想像ができていなかったことですが、そういう使い方もされていますという一つの事例としてお話ししました。

もう一つは、私のお配りした資料に全文を、これも本人の許可をもらっています。お手元の資料の最後の方に3ページに、長いレポートのような「劣等感は最高だ。卒論に変えて」といものです。これもSNS上に、これは秘密のグループじゃなく、オープンな形で投稿されたある大学生の文章です。先ほど牧野委員が質問されたことにも関連すると思いますが、彼らにとっては、Facebook や Instagram の「いいね」の数は、その人の価値のように見える指標になっている。そういうことを、彼も言っています。また、楽しそうな姿が溢れているので、自分の幸せの尺度を見失い、それがひがみに繋がり、「いいね」をあえてしない。エスカレートして、「炎上」することにも繋がっているのではないかという考察がなされています。こういう感じで自己表現というか、意見表明という形でSNSに情報を投稿することもなされているという一つの事例ということで今日お持ちさせていただきました。長い文章なので、お時間があるときに読んでいただければと思います。

あまり、結論めいたことは私も言えないですが、やっぱりミレニアルズ世代と接していて、その子たちの、別の人的人生は生きることができないので、その子たちそれぞれが持っている自分の強みや「らしさ」を自覚するというのを、いかにお手伝いができるかが、私は大事だなと思っています。親や先生以外の第3の場所で、世代も違う、価値観も違う、いろんな人と対話をリアルです。そのことで、自分の価値観を見つめるとか、ありのままの自分を肯定できるようになるとか、その過程の中で、失敗に対する受けとめ方とか、人と不必要に比べて落ち込まない態度みたいなことを習得すると、結構ヘルシーに生きていけるのかなと感じているところです。普段、大学生と面談するとき心がけていることは、ありのままというか、先ほど言ったような、上から目線にならないとか、その人の個性を尊重するというスタンスを大事にしながらか、ありのままを話してもらおう。私には、あなたはこういうふうなところが素敵だなと思ったよと、その人らしいなと思ったと、すごく特徴的だねと、思ったことをそのまま伝えると本人は、はっとすることが多いです。そういうふうに言われたことがなかったという感じで、自分の「らしさ」を発見すると、とても嬉しそうに、それを大切にメモして帰ることが多いので、そういう承認をされたいのだろうなと思います。あとは、そのまま悶々としていることが多いので、その人にとっての最初の、はじめの一步が何かということと一緒に考えて、社会に出て行く一步みたいなのところのアクションの選択肢を提案することを心がけています。あまり結論めいたことは言えないのですが、私の意見発表とさせていただきます。

○ 藤井部会長

ありがとうございました。それでは、続いて牧野委員からお願いします。

○ 牧野委員

私の方から、難しいタイトルがついていますが、簡単に話を進めたいと思います。田中委員のご報告から見ると、私は世代論で言うと新人類世代の走りのところにいます。ポパイ・JJ世代ではないですね、ぎりぎり入れ替わるところにいますので、ちょっとよくわからない世代です。もう一つ、お話を聞いて私も大学でいつもそう思うのですが、私は大学の教員としては、経験や扱っていた学生たちが偏っていて、元は名古屋大学に16年、東大に12年という形でい

るので、偏差値が高い子たちです。ただ彼らとつきあうのはとっても面倒くさいという感覚は、一貫してあります。もう少し言いますと、こんな言い方はおかしいかもしれませんが、彼らに気を使わなければいけないおじさんたちが、いっぱいいるのです。大学の教員には、特に。彼らは、おじさんに気を使ってくれていないのではないかなと思うこともよくあります。メールの返事もそうです。だから、彼ら学生はあれこれ言ってはいるのですが、何か自分だけのことを言っているような感じがして、その上、私たちおじさんには自分に気を遣えという。こちらが、気を遣わないと、アカハラやパワハラで訴えるみたいなことを言う。これってどうなのと考えていますけれども、どうでしょうか。

今日お話したいことと関わりますが、例えば「0 か 100 の消費社会」と書きました。簡単に言うと、先ほど「育成」について聞いたのは何故かという、子どもは、育てて大人になる存在なので、子どもは、まあいいよねと大目に見てもらえる。また、育成の対象、つまり教育の対象になって、将来大人になるから、働き手になるからという形で教育を施されていくという、いわゆる大人の前の段階として発見されたものとしてある。そこでは、子どもたちはある意味で将来の大人として価値化されてきたということがあるはずなのですが、子どもであるうちは、異文化として認められていて、いますぐに0か100かで評価されるわけではない。でも、今はそうでなくなっていて、子どもであることそのものが価値化されてしまう。しかも、それは何の基準によって価値化されているかと言うと、基準はないのではないかとことです。それも、評価されるか、されないかということは、それぞれの関係性で決まっていくので、自分が個性だと思っているものが、実は個性ではないと否定されてしまう。そういうことはしょっちゅう起こります。そうすると、先ほどの話でありませんが、私たちが大学で学生を指導して認めたとします。それは、例えば彼の研究について認めたのですが、全人格的な承認になってしまっているところがあります。それで、急に他の学生に対して尊大になったりします。次にその研究でつまずいたり、ちょっと間違っただけをしたりすると、私たちが注意したり、指導したりします。そうすると今度は、全人格的に否定されたことになってしまい、僕は牧野先生に嫌われた。僕の人生はもう駄目だということが起こる。逆に、認められていると何が起こるかと言うと、私がお父さんみたいな扱いになってきて、全人格的にベターっと来るので、断るとそれがまた、否定された、僕は人生もう駄目だという形になり、そこまで自分を否定した牧野が悪いと、パワハラで訴えられる。いろんなことが起こります。こんなことが続くと、もう指導にならない。これは、何なのかということがよくあります。

例えば、自己責任ということも随分になります。これは、うちの学生も名古屋大学の学生も、ものすごく気にしています。何を気にしているのかと言うと、一つの例を挙げますと、今、東大生はとても忙しいです。卒業単位ぎりぎりしか単位を取らない。私たちの世代は、要らない単位をいっぱい取って、140 何単位で卒業できるのに 200 単位ぐらい取っている。いらぬ単位がいっぱいあるけれど、これは面白そうな授業だというものを取っていました。今は、ぎりぎりしか取らない。取らないと大学の授業はスカスカなので暇なはずなのに、ものすごく忙しい。何をやっているかと言うと、例えば ETIC に行っているとか、インターンシップやセミナーに通っている。2年生からすごく忙しい。一体何をやっているのかと言うと、「人脈」を作りに行っているとすぐに言います。なんで人脈なんかつくっているのかと言うと、失敗したら頼る人を作っておかないと危ないと先輩から聞いたという話ばかりです。口コミでそれが広がっていて、とにかく失敗したら誰も助けてくれないから、自分で頼れる人を作っておきなさいということが先輩からの言い伝えとしてずっと伝わっていて、大学の授業もそこそこに、一生懸命になっている。たまに、単位を取り間違えて、留年する学生が出てくるのですが、そういうことになってしまう。とにかく、全て自己責任でやらなくてははいけない。失敗したっていいじゃないと言うと、駄目なのです。失敗は許されないので。とにかく 100%でいかなきゃいけないと思いついていて、失敗したら、社会はもう助けてくれない。だから、

そうになったら助けてもらえる人、頼れる人を作っておかないと危ないというふうになっている。

次に、「やりたいこと」の呪縛についてもそうです。例えば、子どもの頃から、やりたいことをさせてあげるから、やりたいことをしなさいと言われ続けて育ってきています。やりたいことというのは、いろんな体験をさせてもらったり、ある程度制約をかけられないと、出てこないはずなのに、フリーハンドでやりたいことしなさいと言われ続けたのだけれども、実はない。そうすると、親が悲しそうな顔をするとか、他の子は先ほどの SNS ではありませんが、輝いているように見える。ようするに、やりたいことがない自分は駄目な人間だと思ってしまうところがあります。だから、自分で早くやりたいことを決めて、それに基づいて、目標を立ててやっていかなきゃいけないと思っている。それがとてもある意味で本人たちにとっては、プレッシャーになっているところがある。

さらに、「個性化」の誘惑というものがあります。先ほどの個性の問題は、承認の問題とも関わります。個性的であれと言われ続けていて、個性は人と比べないとわからないので、人と比べて自分は個性的だと思うけれども、実はこの個性には、序列があると思っている。例えば、企業に行って面接を受けてくると何を言われるかという、「君は、我が社にとってどんな貢献ができるか言いなさい」で終わればいいのに、「君は、自分の個性に基づいて、我が社にどんな貢献ができるか言いなさい」と言われるわけです。そうすると、えっ、となった途端に、もうそこで私は個性がありませんとか、私の個性は駄目ですみたいな議論になってしまい、とにかくどうしたらいいかわからない。だから、個性的であって、美しい花をそれぞれが咲かせればいいと言われているのに、実は美しさには優劣があると思っている。ただ、基準がない。どうしたらいいのかという、つぶし合うことになってしまう。自分が上に立とうとすれば、相手をつぶすことが一番早いので、頑張っとうに行こうとは思わない。お互いに潰しあったり、顔を上げないで、評価されないように、比較されないようにしようということが起こってしまう。それがあある意味では、下方平準化といいますか、下の方へ、下の方へ皆で引きずり降ろしあって平準化しようとしてしまうことにつながっている。目立とうとしないということが、起こってしまう。

そういうことの中で、例えば、経済産業省が言い始めていて、文部科学省は大丈夫かと思うのですが、経産省が手を出してきているのが「未来の教室」という取り組みで、SNS やいわゆる IT を使いながら、孤立している個人をうまく活用して、次の社会をつくらうとしています。その議論の中で、若者がインターネットを使い、ソーシャルメディアが信頼されてきて、従来のマスメディアがほとんど信頼されなくなってきたという指摘がある。社会のさまざまな状況の中で、個人そのものが繋がっているという感覚を持たないまま、または、共通の価値を持たないまま、孤立することで、自分のよりどころを求めて動いていってしまうので、近いところだけ、つまり価値観が似ているところで固まってしまうという島宇宙化が起こる。そういう形で、社会の情報の流れが変わってきていることを、彼らは掴んでいる。

それに対して、彼らは、私たちは何をしたらいいのかということを行っているのですが、彼のいう経済政策は、いわゆる教育政策に転換してきている。例えば、「EdTech」ですとか、「未来の教室」を唱えながら、例えばこんなことを言い始めている。中高生、大学生と社会人をつなげていこうという形で、学校を通して、社会と繋がられるような形で考えようという話です。さらに、「EdTech」でいわゆる教育にテクノロジーを組み込んで、民間教育と公教育、また産業界、先端研究、地域社会を組み込んでいこうということで、ちょっと私は不安に思っています。これを言うと、また時間がなくなります、学校が橋頭堡になって、地域社会をこの枠組みに組み込んで、社会全体をある種の統合へと向けて再組織化しよう、そのときの観点は、個人を対象とするのではなくて、いわば人格を相手にしないような、ある種の生理的な反応を利用しようとする手法を採ろうとしているようにみえる感じがしています。こういうことを今、経産省が考え始めているということがあります。さらに、そのときの一つの議論と

して、例えば、苫野一徳さんが経産省の審議会の参考人として言っているのは、個人というのが基本的にあって、従来みんなと一緒に学んで、同じ価値を共有していたのだけれども、いまではそれがバラバラになってきていると指摘しつつ、それを今度は共同化していく必要があると指摘して、プロジェクト化していきましょうと言うのです。個人がバラバラになっていくのに対して、学びのプロジェクト化を組織して、探求的な学習や共同探求者といった形で、改めて教育し直していきましょうという議論になっていくのですが、個人をそういうふうに捉えていいのかということが問われていないというところがあると思うのです。個人の、例えばニーズややる気というものが、個人が持っているものではなく、元来、関係性の中から発生するものと捉え返せば、こういう議論にはならないはず。彼の議論は、個人が元から持っているはずのものを出しなさいという個性化の問題と繋がっているところがあって、これがうまくいかない、子どもたちは、本当に自分はもう駄目なのではないかと思ってしまう。それが人格を相手にしない経済と結びつけられると、生理的な反応を利用して、個人の行動が管理されてしまう。そういう動きになっているということです。その意味では、もう一度やはり、関係の中で子どもたちは存在しているし、私達も存在しているし、関係の中で自分の存在を感じ取っているところを、捉え直しておく必要があるのではないかと思います。

ただ、言語能力が、いわゆる読解力も含めて、とても落ちていると言われてますし、自己肯定感も下がってきていると指摘されている。しかし例えば、埼玉県の調査で分かってきているのは、非認知能力という、いわゆる肯定感ですとか、承認関係の中において、頑張ろうと思う気持ちそのものが、学級経営とのかかわりでは、学力向上に繋がるということがわかってきている。つまり、子どもたちが単に知的なものを詰め込まれるだけでは、学力は上がらない、むしろ自分でやろうとする気持ちが出てくると、学力とが相関関係があることがわかってきている。動機づけとか、頑張ろうと思えるといったことと学力は関わりがあるという議論ができています。

さらに、東大の医学部の知人たちが言っていて、私たちの間で議論になったものですが、「自己肯定感が低い子どもは、むし歯が多い」というのです。何それ？と言っていたら、お前知らないのかと叱られて、調べたら研究論文が出てきたのですが、これはもうわかっている話なのです。簡単に言えば、歯磨きを習慣づけることは、大変な話で、私たちは習慣づけられていますから自分で歯磨きをしますが、子どもたちがそれを習慣化していくためには相当頑張ろうとする気持ちがなければ無理だということです。その頑張ろうという気持ちは、それを生み出す親子関係や社会関係がないと、まず駄目になってしまいます。また、高齢の方々は、誤嚥が多いと言われてますが、これもこの間、老年科の医者と話をしていたら、誤嚥が多い人は、ご飯をおいしいと思っていないということです。ご飯を機械的に食べさせられているのでおいしくない。これは、味付けではないということです。おいしくないご飯をくちやくちやくと口の中で噛んでいるうちに、つい呼吸してしまうので、呑み込んでしまって肺炎を起こす。ご飯をおいしいと思えている人は、意識的に食べようとして、飲み込むことを意識しているので、誤嚥が起らないということでした。その時に、その医師が言うのには、実はおいしいというのは味付けではなく、関係なのだということなのです。子どもの頃からたとえば親との関係でお互いに、おいしいねと笑顔を交わす関係の中でご飯を食べてきて、大人になってもおいしいねと言える相手がいて、高齢になってもおいしいよねっていえる関係の中でご飯を食べている人は、ご飯がおいしい。だけど、機械的にほら時間だからという感じで食べさせられている人たちは、幾らおいしいものを食べさせられても、おいしいと思っていないと言うのです。その意味では、やっぱり感覚や感情も含めて関係性のものとして捉えていく必要がある。もう少しこの社会のあり方の中にこういう関係性を組み込んで、一人一人の肯定感を高めて、その関係が楽しいという形にしていけないと、ある意味では、安逸な方向に、つまり目の前の楽な方に流れて、生理的な反応を利用して、管理されるということになるのではないかと思います。

貧困と学力の問題が問われている中で、この間こういう報道がありました。広島県廿日市市では、朝、子どもに給食を出し始めたというのです。福祉的な措置だとは、教育委員会として言えないので、朝食を食べている子の方が、学力が高いという理由で朝ごはんを出し始めたのですが、完全に貧困支援なのだと思います。ただ、これは学力が高い子は、朝ごはんを食べているという言い方で始まったのですが、本当は朝ごはんを食べる関係がちゃんとある子が、学力が高いということであるはずです。そこはまた家庭の親子関係の問題となってしまって、教育委員会としては言えないので、そういう理由付けにしているのだと思います。であれば、やはり家庭でできなければ、地域できちんと対応するなり、学校でなんとかするなりという形で、子どもたちを、丸々人格としてどう捉えて、肯定していくのか、そういう関係をどうやってつくっていくのかといったことを考えておかないと、子どもたち自身の肯定感を高め、自立させることはちょっと厳しくなるのではないかと思います。

加えて、言葉が弱くなっているということですが、言語は、自分の言葉でありながら他者の言葉でもあって、他者の言葉を覚えて使えるようになっていくということなので、逆に言えば、言葉を発すれば分かってもらえるということが言えるけれども、そこ、つまり他者のものであり自分のものである言葉を発しても、わかってもらえないと思えない、そういう信頼関係が弱くなっているのではないかと。しゃべってもわかしてもらえないと思っている。他人の言葉を自分のものにして使っているはずなのに、本来であれば無条件に自分がしゃべればわかってもらえるという信頼感が出てくるはずのものが、実はしゃべってもわかしてもらえないと感じているのではないかと。そこにある種の社会的な基盤のくずれがあるのではないかと感じるのです。

それを何とかしなければいけないというので、例えば、学習指導要領の議論にもなって、言語と体験ということが打ち出されました。言語を支える体験が弱くなっているし、体験を語る言語が弱くなっているのではないかと。その時に、承認ということが大事になってくる。これは、先ほどの坂本委員の承認とは違うのですが、結局、大丈夫だよと言ってもらえる関係を作っておくことが必要で、その中で例えばドキドキして変わっていく自分をわくわくしちゃうとか、相手も変わってきてすごいと思えるという関係を作ってやる。それが、先ほどの青木委員の御報告にあった形での地域社会での活動ということにもかかわってくると思います。

その意味では、私たちは自分から能動的にかかわっていかなくては行けないと言われていたのですが、ある意味で、そうせざるを得ないようにしてここにあって、それによって、実はそうしようとするという関係に入るのではないかと。例えば、「中動」という議論があります。私自身はもう少し、共動的な存在というか、受動と能動の相互作用の中で生きている私たちみたいな形になるだろうと思うのですが、そういう受動による能動というような存在のあり方をしているのではないかと。それを考えていく上で、例えば従来のアーキテクチャというのか、環境を与えられてその中で生きていこうとする、ある一定の方向に持って行かれるような形での、依存させられることを主体的と思わされるような形の存在ではなく、自分たちで価値を創り出し、環境を利用しながら、お互いに新しい関係性を作っていくという形、そういうやり方に変えていかなければいけないのではないかと。今、SNSは、実は依存から共有へというところになっている感じがします。もう少しそこを、自分たちで使い返すような力をつけていく必要があるのだと思います。また後から議論をしていただければと思います。

簡単に言うと、もう成長や発達をしない社会に私たちは生きていると思ったほうがいい。社会とはそういうものになっている。先ほど、だから成長について聞いたのですが、過去の成長や発達は、基準がはっきりしていました。例えば、労働者として働ける力を身につけていくとか、また会社でちゃんと働けるようになる力をつけていくということにおいて基準がはっきりしています。例えば、偏差値が高くなるとか、ある基準をクリアすれば合格できるとかということにおいては、はっきりしているわけです。ですから、過去はある意味では、会社で働いて

いる時間は、自分の働きで評価されますが、それ以外のプライベートな時間は別に評価の対象ではなかったはずですが。けれども、今は、そこも含めて、すべて日常生活から何から何まで全部評価の対象になってしまいます。発達や成長をしなくても評価されるわけです。未熟であることが、将来のおとなになるという意味での評価ではなくて、即自的に価値化されて、カネ換算される、そういう社会になってきている。しかも、そのあり方が、今日評価されても、明日は意味がないと言われるかもしれないということの中で生きていることになっている。変化は、成長、発達という一方向に向かって大きくなっていったり、一方向に向かって高まるという感覚ではなく、バラバラといろんな方向に動きまわっている状態になってきている。その都度、その都度、だからこそ、ぶつかったところで評価されないと不安で仕方がないという社会に生きているわけです。このようなあり方を、どうしたらいいのかということをもう少し考えなければいけなくなっているのではないかということです。すみません、難しい話になってしまったかと思いますのでまた議論してください。お願いします。

○ **藤井部会長**

ありがとうございました。それではただいまお二人のご意見を伺いましたけれども、それをもとに質疑応答、意見交換を行いたいと思います。どなたかご意見、ご質問ありますでしょうか。

○ **坂本委員**

他人のものである自分の「言葉」、他者からの言葉が欲しいということは、どのようなことでしょうか。

○ **牧野委員**

あなたが使っている言葉は、あなたが作ったものではないでしょう。この社会に生まれ落ちてきて、たまたま日本語を使うようになったわけです。逆に言うと、日本社会において日本語を使えば、他人にわかってもらえると思うけれども、自分の言葉で自分のことを全部言い切れますかということです。言い切れないので、だからもっと言葉を与えて欲しくなる。人からあなたはこういう人間ですよと言って欲しくなるという関係が生まれてくるので、そこで対話が始まるわけです。けれども、そこが切れてしまっていることもあるのではないかということです。

○ **坂本委員**

学習指導要領の言語と体験ということにつながる。

○ **牧野委員**

学習指導要領では、そこを重視して言語活動と体験活動をきっちりやりましょうねという議論になっているので、地域学校協働活動という議論になっているということです。

○ **田中委員**

牧野委員の発表は、私の発表と重なる部分が結構あるのかなと思いついていました。冒頭おっしゃった、気を遣い過ぎているという件について、お話を聞きながら考えていました。ただ、そこがないと会話のテーブルに立てない、つけないという印象もあって、お話の中にもあったように、全人格を否定されたように思ってしまうので、そこから先を取り戻せない感じがすごくあります。ですから、すごく最初に気を遣うのですが、そのステップを経ないと、厳

しい指摘もできないというところは日々感じています。その世代が、どんどんマジョリティになっていく、これから社会に出て行くという事を考えると、それは、所与のものとして、こちら側の接し方、こちら側と言っていて、私もどっちなのかという感じですが。接し方自体が変わると、そうすると彼らの可能性、可能性もすごくある世代だと私には見えて、道具の使い方というところで話したような、生きいきすると本当に信じられないパワーを発揮すると考えています。

○ 牧野委員

それはそう思います。だから、逆に言うと 27 歳の子たちを扱って、子って言わなきゃいけないような状態になっているということです。27 歳という大人のような人たちを扱っているわけではなく、子どもを扱っているようにして、大人が気を遣わなくてはならないということは、確かです。だけど、逆に言うと、彼らが本当の大人になれるかという、ならないままいつてしまうわけです。もうちょっと言えば、彼らが社会全体のマジョリティになったときに、彼らが他の人のことをそうやって対応するかというしなはずです。私たちがしているみたいには。そういう時に、この社会はどうなるのかということも、ちょっと不安だということです。逆に言うと、おじさんはやっぱり気を遣って欲しいわけです。

○ 青木委員

そういう子どもたちが生まれたというのは、やっぱり体験が足りないのでしょうか。

○ 牧野委員

大きな話をすれば、私は、社会の構造が消費社会になってしまっていて、個性化だといったところから、もうそれが始まっているのに、手を打ってこなかったということだと思います。もう、40 年近くそういう状態に日本社会はあります。大体、1983 年だと言われていますが、社会的には、ディズニーランドが開園した頃から、消費社会に入ったという議論がなされています。俗な言い方をすれば。そういう社会なので、その頃から、簡単に言うとお父さんが稼いだおカネを使って、一過が生計を立てるという関係ではなくなるわけです。「女子ども（おんな・こども）」でもと言われましたが、アルバイトで小銭が稼げて、彼らが消費主体になってくる時期が 80 年代に始まりました。子どもが消費者になっていくわけです。その頃に、だから彼らは労働力として育成されなくてもお金を稼ぐようになったわけです。それが例えば、90 年代のバブルの頃の女子大生ブームのように、キャーキャー言っているだけでお金が入るといった時代がやってくる。そういうことの中で、子どもが育成されて、労働力として大きくなっていき、働くことが評価されるという時代ではなくなってきている。

それに対して、ではこの社会はどういうような関係を彼らとつくろうとしてきたのかということ、ある意味では放置してきたということではないかなと思います。従来は、産業社会というか、製造業の社会で、いわゆる原料を使って加工して価値を作り出すということにおいて、やはりそこまで労働力として育成しなければならぬし、作るという過程を経なくては、物ができる価値が生まれなかったわけですから、時間がかかるわけです。その中で、実は自分たちが自我なら自我を維持し続けなくてはいけないわけです、製造しているということにおいて。自我の一貫性が保たれなければ、モノをつくることも、価値を共有することも、市場を形成することも難しかったのです。しかし、今は、それこそいわゆる数字的には経時的じゃなくて、即時的に、例えば坂本委員もここにいるということだけで、ネットでいいねとポチっと押してくれると、価値があるねと言われる時代に入っている。だから価値を生産しないわけです、ある意味では。その場、その場で、その関係性において価値が決められてくるという社会に入っている。その中で若者たちが生きていくとすると、どうなのか。ちょっとそこから先は

うまく言えないのですが、そういうように見えるということです。

だから、私たちが大学の中で議論しているのは、例えば基礎研究は駄目だよねという話になるわけです。根性論とか、頑張れとか、時間がかかるとか、なんだかわからないけど、楽しいというようなことを続けていくと、時間が経つにつれて、結果が基礎研究として出てくるはずだったものが、もう今は無理なのです。本来、楽しいことをやっているよね、好きなことをさせてもらっているよねと、続けなければならない研究なのですが、今の文教政策はそうならない。3年で成果を出せと言われてしまう。もう無理です。すぐに成果の出る手っ取り早いものという形になると、ちょっと調査というものをして、自称論文と言われる報告書を書くみたいな形になっていて、研究として突き詰めることができなくなってしまっています。

○ 笹井会長

よくわかりました。ありがとうございます。成長するとか、価値を創造するとか、地域もつくればそうですかプロセスの概念なわけです。価値創出において、プロセスそのものの意味があまりなくなっているということですよね。そうすると、教育って何だろうとか、我々、中教審も含めてですけども、教育にあまり意味がないというか、つまり即時的に存在していて、要するに手づくりして、いろんなプロセスとか、いろいろ苦勞が良いとか根性で我慢してというプロセスでできたこと、達成感というものは意味がない。牧野先生としては、そういうのは、これからのトレンドとしてもそういうこの社会の動き、動向というのはやっぱり続いていくことなのではないでしょうか。

○ 牧野委員

今までみたいに、育成して行って、同じような国民にしていくとか、同じような労働力にしていくという議論における教育は、もう多分ないだろうと思います。ただ、さっき言った変化がバラバラと継的に繋がると感じているにおいては、あるのだろうと思います。

例えば、先ほどの ETIC の話ではありませんが、関係をつけて、思わぬことが起こるという力を発揮するということに、賭けていくといった形になっていくだろうと思います。ただ、そうならない子たちもいるわけですし、そうならない子の方が多いと思います。今までの社会は、どちらかというと全体を同じようにしていく、同じように働けるようにしていきながら、分業の中で、誰でも働ける状態を作っていくことをベースに作られている社会なので、だからいわゆる生かす社会、生かす政治、生かす権力(生政治、生権力)と言われたのですが、けれど、もうそうではなくなっていくのかもしれない。反面で、あらゆるものが価値化されていくということにおいては、どんな状態であっても、価値があるよねと言われるのかもしれないし、何かそこを少し、例えば ETIC のような団体や行政も大学も含めて、変化し続けるというところをプッシュしてやるという関係に入るということなのかなと思います。成長、発達するという、同じ方向に向かって大きくなっていくということではなく、皆が日々多面的に多方向に変わっていくことを認めて、背中を押してやるという関係に入るのかなと思います。それを今度は、教育と呼ばなくてはいけなくなるのかもしれない。そうすると、やっぱり学校のあり方も変わらざるを得ないだろうと思います。

○ 笹井会長

ありがとうございました。

○ 藤井部会長

そうしましたら、皆さんからいただきましたご発表の内容を踏まえて、全体を通じた意見交換をしていきたいというふうに思います。どなたかいかがでしょうか。

○ **笹井会長**

青木委員がおっしゃった、森の里のプロジェクトに、子どもと書いてありましたが、それは15歳以下の子どもを念頭に置いているということでしょうか。

○ **青木委員**

私は育成会にずっと入っていましたから、基本的にはそうですが、高校生も、ジュニアリーダーなどの関係もありますので、そのお付き合いも多いです。ただ、20歳以上はなかなか大学で外に出してしまうので、森の里ではあまり、活動の中ではお付き合いがないです。僕は思っているのですが、もっと小さい頃からいろんな活動を通して、多様な人と交流することが非常に大切だなと思っております。そういうきっかけづくりをやっぱり地域社会の中でいっぱいやってやるということが、とても大切だなとずっと昔から思っていましたので、そういう活動の場を作っている。それが成長して子どもたちが、大学生として巣立っていくという過程を今作っている状況です。

○ **笹井会長**

小さい頃から、体験活動を豊富にした子どもたちは、将来大学生や30、40代それ以上になっても、例えば、東大に入っても牧野先生のことを馬鹿にするような、そういう子にはならないのでしょうか。

○ **青木委員**

そういう子も生まれるかもわかりませんが、僕らが今感じているのはやっぱり相手の気持ちをよく考えるというのはよく身につくかなと思います。集団活動が多いですから、どうしても子どもたちの中でも単発で参加する子と、やっぱり多種多様に年間通して参加する子の差は確実に出てきます。やっぱり、学校でも集団活動をしているのでしょけれども、それがまた地域になるとまた違うのだと思います。学校とは違うグループになりますので。だから、そういう意味では良い経験をしているかなと思います。この間、久々にキャンプに連れて行ったのですが、その中の半分は、今までずっと小さい頃から一緒に活動している子どもたちで、半分は、単発で入ってきた子どもたちでした。全く活動を見ていて違います。そこのところが皆と話しながら、やっぱり違うよねという話をしています。その場を見て、自分で判断している子と、そうではなくば一っと遊んでいる子と、その差はやっぱり歴然として違うかなと感じています。今、神奈川県では、「ともに生きる」ということを盛んに言っていますが、まさに私たち地域は、やっぱりともに生きるということを前提にしないと、社会が成り立たないと思っています。だから、ともに生きる価値観というか、それをやっぱり地域活動を通して、教えていきたいし、自分もそれを感じないといけないかなと思っております。だから、ともに生きるという、ともに学び、ともに育つというのは、子どもも大人もそれを通して、お互いに学び合うという、そういうまちづくりにしたいなと考えておりますし、それが今少しずつ実践でき始めたかなと思っております。

○ **藤井部会長**

よろしいですか。今回ご発表いただきました4人の委員に伺いたいなと思ったのが、田中委員や牧野委員のお話を伺っていると、結構大人世代のもどかしさというか、何か大人の方がちょっとどうしようかなと悩んでいるのかなと思われました。青木委員のお話はすごく地域の中で、しっかりした大人をされているのかなと思いました。坂本委員は、大人はなんかもう、ちょっと遠い人ということだと思いました。

一つ、今回青少年ということが、もちろん中心になっていますが、大人、子どもの相互性というか、そうしたところはどうか、また、大人が関わる際に自分たちにもすごく負担があったりとか、悩みがあったりすると思うのですが、そうしたものをどのようにして、青少年の教育へ還元しているかとか、あるいはそれを別の形で大人が大人をケアするようになってやっているみたいな形になっているのかなど、少し子どもへの視点を、ちょっと大人の振り舞いを含めた形で少し相互性みたいなところもお伺いできたらいいなと思ったので、ちょっと教えていただけるといいなと思います。

○ 青木委員

私は、最初に自分の子ども以外と関わりを持ったのは、PTAでした。そこでいつも感じたことは、やっぱり自分の子ども以外に、子どもと接することがなかったものですから、やっぱり接してみて、話し方も全部違うし、考え方も全部違うし、それを数年続けていくうちに、自分が成長しているということを実感しました。今までにない世界だなと。これを十何年間続けていると周りの大人を見ていても、やっぱり自分の子ども以外の子どもたちと地域でわいわいがやがや、やっていますので、そうすると大人が確実に成長していることを実感しています。関わっている大人が、みんな楽しそうな顔をしています。僕は、子どもの縁と言いましたが、まさに子どもの縁でネットワークができて、それがある意味で、いい意味での地域の活動の力になっているという気がしていますから、僕らにとっては、子どものためにやっているというか、自分のためにやっている意識の方が強いです。これがまわり、まわって子どものためにになっていると最近考えるようになっていきます。それを「融合研」で岸 裕司から教えてもらった「子縁」と呼んでいるのですが、子どもの縁で繋がったネットワークは、非常に地域の中では、大きな力になっていると感じています。

○ 牧野委員

大学という場所にいると、教育学で社会教育だからということもあるかもしれませんが、やっぱりとても難しいなと思います。簡単に言いますと、学生や院生たちは、こちらは研究で評価をしているのに、人格的に全部評価されていると思ひこむ。だから、研究でちょっとつまづいたところを、こちらは指導の一環で注意すると、全部崩れるということがよくあります。ただ、社会教育なので、学生院生たちを地域社会に連れていくということがあり、地域の中で揉まれる経験させると、変わってくる者もいます。ただ、なかなか難しいのは、私たちが大学として入ると、当然、地域は私たちのことを尊重してくださるので、それを何か自分が人格的に尊重されていると思ひ込む学生が結構いるのです。そうすると、地域に対してものすごく高飛車になってしまう、偉そうになってしまう。こんなことはおそらく、青木委員のところは受け入れてくれないと思います。そういうことを注意すると、また先生から否定されたみたいになり、帰るとパワハラで訴えられていることがあるわけです。また先生ですかというように、私のところに調査が来ます。そういうことも含め、扱いがとても難しいなとよく思います。

ただその中で、研究を認めて、支援していくと、信頼関係ができてきて、自分で自立をしていこうとするというか、そういう関係に入れる子たちもいますが、なかなか厳しいです。やはり、ここでももう 30 歳近い院生を「子たち」といわざるを得ないのがつらいです。しかも変な話で、これが今度、先輩後輩の関係になると、自分は牧野に認められている、オレの言うことを聞け、オレの言うことが牧野のいうことだ形で、後輩に接するわけです。そうすると、後輩を潰していつてしまうのですね。そういう関係になると、その彼らが育たないので、それを注意すると、また自分を否定されたといってパワハラだ、アカハラだと訴えるということがしょっちゅう、あちこちで起こるので、もう学生や院生をもちたくないという気持ちになる時もあります。そういうことが、大学のあちこちで起こっています。

それから、東大だからということもあるかもしれませんが、理工系の同僚の話を聞いていると、研究とくに実験をさせようとするのが嫌がられる。それで「これは君の仕事だし、やらないといけないよ」といった時点でもうすでに関係が壊れてしまう。その後何が起こるかという「僕は先生に実験、研究をさせてもらえなかった」と訴えが出るようになり、自分がやらなかったことを全て教員の責任にしてくるということが、しょっちゅう起こります。何が起こるかという、高い学費を払い、契約関係に入っているはずなのに、僕はその教員から研究指導を受けられなかったし、研究をさせてもらえなかったという訴えになっていく。こういうことが、しょっちゅう起こるので、その辺りもどうしたらいいのか。逆に言えば、東大生だからなのかかもしれません。一部の若い子たちの形なのかもしれないですが、そういう私自身が戸惑いというか、悩みはあります。

本当はそこをもう少し、やはり関係の中で、彼ら自身もきちんと生きているし、例えば研究で注意されるということは、認められている関係なのだと分かってもらわないといけない。ただ、実際に研究で評価されたとしても、あなた自身が人格的に全ての人々より優れているというわけでもないことは、分かってもらわなければならない。そのあたりの関係の作り方を大学で対応できるかという、私自身は感覚的には無理だと思っています。もっと早いうちからやっておかないといけないので、幼稚園ぐらいから青木委員の所に送り込んで、鍛えてもらいながら大学に入ってもらえるといいなと思っていますけれども。

また、そこを ETIC は苦しんでやってらっしゃるのだらうと思うのですが、どうなのでしょう。

○ 田中委員

そうですね。先ほどの話の中で、苦しそうだっただけかもしれませんが、苦しくない学生もいます。やっぱり、自己肯定感や、親との関係かもしれないですし、基盤ができていない子については、ほっといても結構生きいきしているなど、お話を伺いながら感じました。

私は、2005年に新社会人になりましたが、先ほど端境期と申し上げましたが、当時の上司は、非常に根性論で、いいから行って来い、数を行けば売り上げが上がるということに、強烈な違和感を新入社員の時に感じていたなというのも今思い出しながら聞いていました。そういうマネジメントを受け、社会人5年目ぐらいにエティックに転職して、転職した当時は、そうした根性論を自分のメンバーや、インターン生に対して、そういう接し方をして、たくさん痛い目にも会い、失敗したということがありました。少し、ここのところ関わり方を変えていくと、そこを会得した感じがあります。ここ数年ですね。ですから、自分が受けてきたマネジメントに違和感を感じていたけれど、そこに染まっていった自分もいて、ですけど、そこをちょっと変えていったところに、うまく彼らと関係が築けている今の実感もあるということと、たくさん学生いても難しいというか、その信頼関係をつくるのを自己肯定感がないという状態の子については、非常に丁寧に検証する必要がある。一方で、基盤ができていない子については、安定感があるし、すごいなど、本当に彼らを尊敬するなという、力のある子がいっぱいいるなというところをお伝えしたいと思いました。

もう一つすみません。自分は5歳の娘を育てていて、先ほどの牧野委員の食卓の話に、どきっとさせられました。朝、急いで食べて、食べてとやっちゃってしまっているなということも含めてですが、同世代の母親を見ていて、結構、楽できるようになっているんじゃないかなと思っています。ボタン一つで揺らして子どもをあやす道具や、缶詰に入っている離乳食など、育児がどんどん楽になっているはず。それに何か違和感を感じるけれど、一緒に赤ちゃんを連れて会ったときに、そういうことを目にして、なんていうかお金を払えば楽ができる。育休中も、ある意味で自己実現のように感じている人もいっぱいいて、赤ちゃんがいるけれども、自分の勉強の時間であると定義して、そちらにすごくいって、子どもを見ていないことも気にな

ると感じながら、一番手をかけ、目をかけする時期が、楽できる選択肢がやっぱりいっぱいできている。楽というか、子どもに向き合わなくても育つという状況ができているところを、今、思っていました。以上です。

○ **坂本委員**

ご質問をもう一度よろしいでしょうか。

○ **藤井部会長**

本日の御意見では、大人世代のもどかしさという話もあったように思いました。坂本委員のお話ですと、大人はちょっと面倒くさくて、ちょっと距離があり、ちょっと大学の先生は、そんな信頼するとかそういう対象でも特になく、というお話のようにも伺えました。

青少年支援という観点も必要になったときに、大人世代の関わりというものがどうあるのかという関心もあり、若者から見たときに、大人世代との相互性というところが、どういうところで発生しているのかというのをちょっと教えて欲しいということです。

○ **坂本委員**

大人が遠い存在というわけではないですが、大学生活で、サークルにも入らず、アルバイトをしてあとは何もしないと、すごく暇な、資格も取らないような大学生活を送っていたら、確かに大人は、課題ばかり押し付けてくる人という感じに思われます。ただ、そういう人もいますが、そうではないし、大人は面倒くさいなと思う人は他の活動でも、多分ゆるゆる、ぎりぎりに単位を取り、何となく卒業できてしまえばいいだろうという感じの人だと思うので、全員に当てはまるとは限らないと思います。

私は 1997 年生まれでぎりぎり、ほぼほぼ、ゆとり世代です。ゆとり世代と言われて、すごく悪い感じがします。ゆとり教育を受けたくて生まれてきたわけではないのに、「ゆとり」は打たれ弱いなどと言われているのはわかっていますが、甘えた言い訳をすれば、でもその教育を与えてくれたのは、大人ですし、「ゆとり」だからと甘やかしてくれて、やっぱり弱いからさらに、優しくしてあげなくてはどうか、そうすると、ますます我慢など身につかない。私たちなりに、我慢などそれぞれレベルはあると思いますが、普通に生活をしていたら、いろんな場面であると思いますが、それでは足りないのかなと思います。もちろん人口が減っているし、団塊ジュニア世代のように、大学入るにも何でも競争があり、確かに減っているかもしれないですが、競争していないわけではない。そんなに前の教育は良かったのかなと、良い教育を受けてきたのだろうか、私たちはそんなに駄目なのだろうか、ゆとり世代と言われると思うところがあります。日本中で使っているから、今更どうこうという話ではないですが、じゃあどうしたらゆとり世代で弱いことについて、じゃあどうしたらいいのというところは、今の大人たちが、私たちぐらいの時にどれだけすごい根性や我慢、強制を強いられてきたのか知らないですし、ではどうしたら伸ばせるのか、強くなれるのかというのは、疑問に思いました。

○ **牧野委員**

今、お話を伺っていて、やっぱりゆとり世代と言われたくないのですか。

○ **坂本委員**

言われたくないです。

○ **牧野委員**

「ゆとりですが何か」というドラマがありましたが、私は大学の教員をやっていて、ゆとり

世代は、多才だと思います。私の大学教員としてのキャリアの中での学生とのつきあいは、最初は団塊ジュニアで、次にゆとり世代がきますが、悪くないなと思っているところもあります。ゆとり世代は、多才ですよ。いろんなものを諦めないでやってきているので、音楽ができ、スポーツができるなど多才です。我々のように、詰込みで苦しんできた世代は、大体途中で諦めている。部活や趣味を途中で辞めさせられているので、できない状態で大学に入ってくるけれども、ゆとり世代はいろんなことをやってきているので多才だと受け止めていることがあります。

ただ、もうちょっと言うと、先ほど、おじさんたちを尊重して欲しいと言いましたが、逆に何か、びくびくしている感じを受けます。とにかく、常に評価されている感じに受け止めているので、自分は自分だから放っとけみたいと思えないのではないかというか、自分はこれがちゃんとこうなって、しっかりできているから大丈夫だと言えないのではないか。常に、誰かから評価されることを気にしていなければいけないという感じがします。それは、先ほどの議論の裏返しで、私たちが例えば調査に行くからと有志を募って行こうとする。それで有志と一緒にいこうとやっているところへ、たまたま自分は他の用事があり来られないというのが出ます。どうしたらいいのでしょうかと言うから、自分で決めなさいと言うと、本当に自分で決めていいですかと、ずっと言い続けるのがいます。先生が決めてくださいと言うのですが、決められる訳がないだろうと。自分が他の所用に当たって行けないと言ってきたのだから、それを選ぶのか、こちらの調査に来るのか自分で選びなさいと、別に調査に行くことは強要じゃないからと言っても、先生が決めてください、本当に調査に行かなくていいでしょうかとずっと言うというのが、結構います。そうなら、なぜ自分は他の所用があるなどと言ってきたのか、と聞くのですが、それはそれ、これはこれなのですね。だから僕が、あなたが決めて、所用の方を選んで来なくなったということになると、私からの評価が下がるのではないかと思っているのか。こちらが、そんなことはしないとやっているのに、といっても、でも、といって食い下がる。いったい何がしたいのかよくわかりません。そういう学生がかなりいます。びくびくしている感じも受けるときがあります。

○ 坂本委員

他人からの評価をすごく気にしている人は結構います。そういう人は、正直に言って私たちからも面倒くさい人だと思いますが。

○ 牧野委員

だけど、自分にはきちんとそれが核としてあって、人が何て言おうと、私はこうだから大丈夫だと思えているかという、どうもそういうこともないのかなという感じを受けます。そこに、面倒くささが出てくるといえるのか、ものすごくケアしなきゃいけないし、ケアをすると、今度は全面的に依存してくるということが起こり、別にお父さんじゃないからと言うと、また嫌われちゃったというようになってしまう。その間合いがとても難しいです。逆にいえば、核がないというか、自分はこれだから大丈夫と思えるものが作られていないという感じを受けるときはあります。

○ 笹井委員

坂本委員に質問です。貴重なSNSの情報をありがとうございました。坂本委員ご自身は、Instagramをやっていない。LINEはやってますか。

○ 坂本委員

LINE、Twitter、Facebookを使っています。

○ **笹井委員**

三つの中でどれが一番気に入っていますか。SNSのメディアとして一番いいものは何ですか。

○ **坂本委員**

いいメディアは、やはり LINE です。使いやすい。情報発信とか、自分のことを発信できたらいいとは思いますが、別にどうでもいいことを呟きたいと思わないし、LINE は自分を発信するわけではなく、電話の代わりというか、昔だったら電話なりメールだったものをやりやすくしたのはLINE だと思います。

○ **笹井委員**

それは、Facebook も同じではないですか。

○ **坂本委員**

Facebook は、会話もできますが、投稿を友達申請をした、友達同士になっている人に見てもらえることが多いです。多分、LINE ができる前は Facebook でメッセージが流行ったと思いますが、あれも使いますが、今はほとんど使わないという感じがします。

○ **笹井委員**

一般的な、例えば新聞記事などで LINE から Instagram に、あるいは Facebook から Instagram に若い人の指示が移行しているという指摘がありますが、そう思いますか。

○ **坂本委員**

思います。

○ **笹井委員**

なぜだと思いますか。

○ **坂本委員**

前回、お話が出たことに繋がるかもしれませんが、写真や動画でいい。言葉を使わずに、言葉は少し添えるだけです。ちらしをワードやパワーポイントで作って少し字体を変えてみたり、ピンクに色をつけたり、丸くしてみたり、ちょっと斜めにして配置するというように、Instagram はそういう感じでしか文字を入れないです。基本は、写真と動画がメインなので、自分がやるのが少なく情報量が多いというか、非日常のキラキラした感じをみんなにアピールできるからだと思います。

○ **笹井委員**

もう一つだけ、坂本委員が何かを投稿するときに、これはどういう人に読んでもらいたいか、こういう人に読んでもらいたくないということを考えて投稿しますか。

○ **坂本委員**

そうですね。Twitter、Facebook ですが、サークルでやっているオーケストラや吹奏楽の関係で友達になった人が多いです。フォローしたり、友達関係になっている人は。例えば、どこへオーケストラを見に行ったり、演奏がこうだったという話は聞いてもらいたいなと思って

います。それ以外の、本当に自分しか体験していないことというか、それこそ「進捗 bot」のように、どうでもいい。誰かが見ていると意識してないかもしれないしというのは、私は載せないようにしています。あとは、これ皆も思っているのではないかなと思った価値観や、気づいたこと。報告、連絡、相談は大事だよねといったことは、Twitter は履歴が残るので、自分が忘れないように載せることはあります。基本は相手を考えて、フォローしてくれている人を考えて、Twitter しているつもりです。

○ **笹井委員**

ありがとうございました。

○ **藤井部会長**

ほかはいかがでしょうか。それでは特に御意見などないようでしたら、議論はここまでとさせていただきますと思います。ありがとうございました。

今回は今年度末に取りまとめることとなっています。中間報告の案について議論をしていきたいというふうに思います。本日の議題については以上となります。委員の皆様から他に何かご意見、ご質問、情報提供などがありましたらこの場でご発言いただきたいと思いますがいかがですか。よろしいですか。では最後に事務局からよろしく申し上げます。

○ **青少年課長**

本日はご多忙の中ご出席賜り、また活発なご議論をいただき、深くお礼申し上げます。次回の第4回企画調整部会につきましては、来年2月4日に、開催させていただく予定です。後日、改めて、事務局からご連絡させていただきますので、ご協力よろしく申し上げます。

○ **藤井部会長**

本日はありがとうございました。それでは第3回企画調整部会を閉会いたします。皆様お疲れ様でした。

以上